

韓国開化期の日本語学習書 『日語捷徑』(1895)について*

黄 雲**

(e-mail : hwangwoon@hanmail.net)

< 목 차 >

- | | |
|----------------------|-------------|
| 1.はじめに | 4. 金沢末吉について |
| 2. 先行研究；開化期前期の日本語学習書 | 5. 構成及び特徴 |
| 3. 『日語捷徑』(1895)の概観 | 6. おわりに |

キーワード：韓国開化期(Korea's Enlightenment Period), 日本語学習書(Japanese language primer), 日語捷徑(Nichigo Shōkei), 金沢末吉(Kanazawa Suekichi), 日本語教育(Japanese-Language Education)

1.はじめに

本研究では韓国開化期における日本語教育の一端を知るため、1895年発行された日本語学習書である『日語捷徑』をとりあげ、その特徴について考察する。

韓国の日本語教育史において、日本語教育の嚆矢は、1414年、朝鮮王朝の司訳院において、外交事務に必要な通訳・翻訳の仕事を担当する訳官の養成を目的で始まったとされている¹⁾。近代に入り、司訳院は1894年に甲午改革の制度改革によって廃止され、「官立日語学校」がその役割を果たすようになる。1910年には韓国が日本の植民地になり、35年に渡って日本語は外国語ではなく、国語としての教育が行われる。第二次世界大戦終了後、すなわち、韓国が日本から解放された1945年からは韓国の公共機関での

* 本論文は、韓国日本文化學會 第52回國際學術大會(2017年4月15日、全北大學校)で発表した内容を補訂したものである。

** 大田大學校、時間講師、日本語教育學

1) 鄭光(2007)では朝鮮時代以前の日本語教育機關の存在の可能性について考察されているが、本稿では扱わないこととする。

日本語教育は行われておらず、韓国で日本語教育が再登場したのはそれから16年後の1961年であった。現在は日本語教育が韓国で重要な外国語教育の一つとして位置を取っている。

以上のように韓国における日本語教育は、時代によって教育の目的と位置づけが変わっており、それに従い、教育の方向や政策なども変化してきた。このように複雑な様相を見せている日本語教育史に関して多くの研究者により検討されてきたが、近代初期即ち開化期に関する研究は、日本の植民地化教育の一環として扱われる傾向があり、教育政策及び学校教育を中心に行なわれてきた。そのため開化期における個人レベルの日本語教育については、成琬珂(2014:66)で指摘しているように「当時日本語習得のために使用された個人レベルでの日本語学習はどのように行っていたかについての研究はあまり行われていない」状況であった。

韓国開化期の前期には『日語工夫』(1891)、『日本語独案内』(1895)、『日語捷径』(1895)、『単語連語日話朝雋』(1895)、『簡易捷径日語独学』(1897)、『独修自在日語捷径』(1905)の6種の日本語学習書が発行されているが、日本人と韓国人の共著である『単語連語日話朝雋』(1895)を除くとすべて日本人により作られた。

上記の資料は『歴代韓国文法大系』で影印されている『単語連語日話朝雋』(1895)を除くとすべて日本の国会図書館で所蔵しているが、2011年に日本国会図書館が「国立国会図書館デジタルコレクション」として上記の資料をデジタル化して公開し、以降、이강민(2011)、Mina Hattori(2011)、金義泳(2012)、成琬珂(2014)、黄雲(2015、2016、2017)、陳南沢(2015)により研究が始まるようになった。

本稿では、上記の先行研究で明らかになった開化期前期の日本語学習書の特徴を整理し、先行研究で個別的に検討されていない『日語捷径』(1895)をとりあげ、その特徴について考察する。

2. 先行研究；開化期前期の日本語学習書

語学学習書は当時の言語使用の特徴が反映されていることから、研究資料としての価値が高く評価されている。開化期における日本語学習書の全体像をつかもうとする試みとしては、한중선(1994)、편무진(2001)、박성희(2005)が挙げられ、黄雲(2016、2017)で

は、開化期前期の日本語学習書に注目して考察した。

以下、開化期前期の日本語学習書の先行研究について書別に分類して記しておく。

①『日語工夫』(1891)

『日語工夫』は1891年5月21日に中野許多郎により韓国釜山で出版された日本語学習書であり、表紙と総21ページの本文及び、奥付からなっており、その大きさは「19.3cm×12.3cm」である。

『日語工夫』について、한중선(2007)の日本語教材目録の中でその書名があげられ、黄雲(2015)では韓国における近代日本語教育の始まりという観点から考察が行なわれた。同論文では、『日語工夫』の構成及び内容についての考察で、「『日語工夫』は、総21ページという非常に短い書ではあるが、「文字・単語・会話」という当時の他学習書の構成と同じ形式をとっており、学習書としての形が備わっていたといえる」と記している。また、『日語工夫』が開化期において最も早い時期に出版されたと見られ、韓国における近代日本語教育の嚆矢であるとし、韓国における日本語教育は、教育機関より早い時期に民間人主導で開港地から始まり、その目的において実利面な役割が求められたと述べている。

②『日本語独案内』(1895)

『日本語独案内』は、1895年6月16日に京城で稲益謙吉により発行された日本語学習書である。『日本語独案内』は、表紙、中表紙と85ページの本文と8ページの附録及び、奥付からなっており、大きさは「21.6cm×14.7cm」である。

本書については金義泳(2012)が会話の内容を分析しているおり、陳南沢(2015)では、同時代の韓国語学習書『日韓会話』(1894)との比較を通じ、日本語の単語や表現を中心に考察した。同論文では『日本語独案内』は日本語学習書でありながら、その韓国語は同時代のほかの韓国語学習書と比べても同時代の韓国語を良く反映していると記している。また、黄雲(2017)では、著者の稲益の緒言から日清戦争で日本が勝利した社会的背景が窺え、編纂目的として「交通及貿易」という実用的な側面を重視したと述べている。

③『日語捷徑』(1895)

『日語捷徑』は、1895年5月31日東京の丸善出版社で金沢末吉により発行された。『日語捷徑』は、表紙、中表紙と4ページの前書き及び82ページの本文と奥付からなっ

ており、大きさは「14.6cm×11.1cm」である。

Mina Hattori(2011)では1868年から1945年までの日本語学の植民談論について考察しており、その論文で『日語捷徑』の前書きの一部が挙げられている。金義泳(2012)では高等学校の教科書にみる日本観を中心に韓国における日本語教科書を考察しているが、『日語捷徑』の会話の内容が分析対象となっている。また、黄雲(2017)では、韓国開化期における日本語教育の成立について考察しており、開化期前期の日本語学習書である『日語捷徑』についてその書誌的情報を記している。上記のように先行研究では、一定の時期における日本語学習書の一つとして本書を扱っており、個別的な検討はまだ行なわれていない状況である。

④ 『単語連語日話朝雋』(1895)

『単語連語日話朝雋』は、1895年6月に日本人の境益太郎と韓国人の李鳳雲によって京城で発刊された日本語学習書である。『単語連語日話朝雋』は、内田定槌の序文(韓国語訳付き)と著者の緒言及び凡例の前書き、「日本諺文」と「目次」、48張の本文から成っており、大きさは「19.5cm×13.1cm」である。

本書は金敏洙・河東鎬・高永根編の『歴代韓国文法大系』(1986)に掲載されていることから、多くの先行研究で言及されている。원우진(2001)では、本書の構成は分類語彙集の形式の前半部と会話を収集した後半部からなっており、日本語はすべてハングルで転写表記され、日本語語濁音のハングル表記に鼻音的要素「ㄴ,ㅇ,ㄹ」を前置する方法は、前時代の『捷解新語』でも使用された表記である述べている。また、本書のこのような特徴は日本語に対する外国語表記案として重要な文献であると主張した。黄雲(2017)は、著者の緒言に、学校教育を受けることのできない人々のため著したと記されている点をあげ、本書が、学校で使われる教科書ではなく、民間人の独学のために著されていたと指摘した。

⑤ 『簡易捷徑日語独学』(1897)

『簡易捷徑日語独学』は、1897年12月26日に弓場重栄が東京で発行した学習書である。『簡易捷徑日語独学』は、4ページの前書きと「目次」、そして108ページの本文から成っており、大きさは「19.7cm×13.6cm」である。

本書について이장민(2011)では、開化期韓国でもっとも早い時期に使用された日本語学習書という点と、春園李光洙も使用したという点をあげ、『簡易捷徑日語独学』の内容

と言語資料としての性格について考察している。同論文では、本書が日本語に対するハンゲル表記の問題点を内包しているものの、韓国人の日本語学習に少なくない役割を果たしていたと推測している。また、黄雲(2017)は、『簡易捷徑日語独学』の緒言に、「今朝鮮で、新しく二商港を開発し漸々日韓の通商貿易を拡張するので、この時期に当たって日韓両国の人々が各々その語学を勉強しようとする者が多い」と学習書の発行当時の背景が書かれており、「通商貿易」における日本語の必要性により学習書が発行されたとしている。

⑥『独修自在日語捷徑』(1905)

1905年9月21日東京で発行された『独修自在日語捷徑』は、金島苔水と広野韓山の共著である。『独修自在日語捷徑』は、表紙、中表紙と10ページの「目次」、そして285ページの本文と奥付から成っており、大きさは「19cm×13.2cm」である。

植田(2014)では、日本近代韓国語教育史の視点から見た商業出版物としての韓国語学習書という観点から、著者の金島苔水とその著書について考察を行っており、金島苔水について「代表的な朝鮮語の普及者・両国の架け橋とするような、誤った評価が下されることがあった。他方では、支配のための朝鮮話教育・朝鮮語学習というように短絡的な把握がなされることもあった」と述べ、当時の言語教育者について一時期の活動を見て、その人物像を評価することを批判している。また、金義泳(2012)では『独修自在日語捷徑』の会話の内容の一部を取りあげ紹介している。

黄雲(2017)では、上記の日本語学習書は、形式上韓国人のために作られた独学用の実用書であり、その内容はいくつかの特徴が見られるものの、商業活動に関わる内容が多いという共通点があると述べている。また、韓国開化期の日本語学習書による日本語教育は、日本人により作成され、韓国人によって学習されたという点では、日本語教育機関における日本語教育の性格と同様であるが、その成立においては民間人の主導により、開港地から始まっていると主張している。

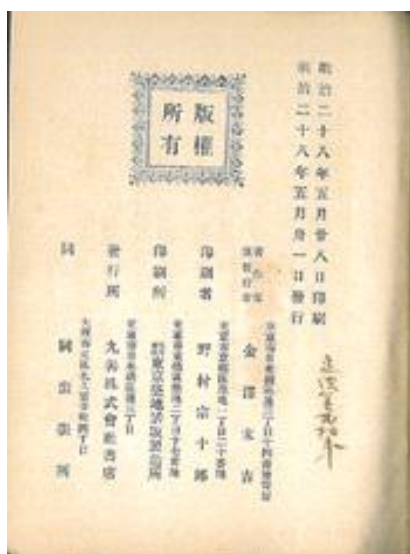
韓国開化期における日本語教育については、韓国植民地化の過程として考えられ、外国語教育としての評価はあまり行なわれていなかった。しかし、近代韓国で行われた日本語教育をはじめとする諸外国語教育に関する研究は、近代韓国を理解する重要な端緒となるだけに、より多角的な観点からの考察が必要であると考えられる。

3. 『日語捷徑』(1895)の概観

『日語捷徑』は、1895年5月31日東京の丸善出版社で金沢末吉により発行された日本語学習書であり、現在日本国会図書館関西館で所蔵している。

『日語捷徑』は、表紙、中表紙と4ページの前書き及び82ページの本文と奥付からなっており、大きさは「14.6cm×11.1cm」である。以下の【資料1】は、その表紙と奥付である。

〈資料1〉 『日語捷徑』(1895) 表紙／奥付(日本国会図書館所蔵)



〈表紙〉

日語捷徑 全

〈奥付〉

明治二十八年五月廿八日印刷

明治二十八年五月卅一日發行

(定価金貳拾錢)

東京市日本橋区通三丁目十四番地奇留

著者兼発行者

金 沢 末 吉

東京市京橋区築地一丁目二十番地
印刷者 野村宗十郎
東京市京橋区築地二丁目十七番地
印刷所 株式会社東京築地活版製造所
東京市日本橋区通三丁目
印刷所 丸善株式会社書店
大阪市東区北久宝寺町四丁目
同 出張所

本書には前書きとして「紫山生」という人物が書いた推薦文と、「編者識」即ち金沢の序文が書かれている。

文社益御清健奉恭賀候陳者御著述ノ日語捷徑一読仕候今ヤ朝鮮ハ一大革命ノ機ニ際シ上ハ政治法律經濟ヨリ下ハ文学社交衣食住ニ至ルマテ一変セサルヲ得サル氣運ト相成候此時ニ於テ朝鮮ノ文明ヲ啓導スルモノ韓人ヲシテ日本語ヲ解セシムルヨリ先キナルハ無之ト存候兄朝鮮ニ在リテ韓語ヲ学ブコト数年此書ノ如キ其余緒ニ成ルモノニ過キ不申候ヘトモ韓人ノ智識ヲ開クノ初歩ト為ルコトハ不可疑ト存候時下春寒未除幸為国自愛

於京城南学 紫山生

今日ノ朝鮮ハ革新ノ氣運ニ際セリ此時ニ当リ朝鮮人ニシテ日本語ヲ学ブノ必要アルハ日本人ノ韓語ニ於ケル比ニ非ザルベシ生近日感アリ一冊ヲ編ミ名ケテ日語捷徑ト曰フ蓋シ韓人ノ日本語ヲ学ハントスル者ニ資セント欲スルニ然ルニ塵事急忙添削ノ暇ナク直ニ印刷ニ附セシヲ以テ其順序当ヲ得サル所アルモ未タ知ルベカラズ大方ノ君子幸ニ之ヲ諒セヨ

編者識

上記の推薦文では、「朝鮮ハ一大革命ノ機ニ際シ(中略)此時ニ於テ朝鮮ノ文明ヲ啓導スルモノ韓人ヲシテ日本語ヲ解セシムルヨリ先ナルハ無之ト存候」、序文では「今日ノ朝鮮ハ革新ノ氣運ニ際セリ此時ニ当リ朝鮮人ニシテ日本語ヲ学ブノ必要アルハ日本人ノ韓語ニ於ケル比ニ非ザルベシ生近日感アリ」と書いており、激変する時代の中、日本語を通じた文明開化を提唱していたことが窺える。

久保田(1996:4)では、日本語が朝鮮開化の手段から同化の手段へと転化していく過程を、日清戦争期から日韓併合に至るまでの教育雑誌や一般雑誌の記事・論説で朝鮮教

育に関するものを取り上げ分析している。そこでは日本語の役割を開化・実利・同化に分けているが、「(日清戦争頃)日本語は朝鮮を「開化」する外国語とみなされていたのである。日本語の役割は、日清戦争が終結する頃は、開化面に加えて実利面も主張された」と書いている。

一方、同時期の学習書である『単語連語日語朝雋』(1895)の推薦文には、日韓両国の関係が親密さを増すに従い、韓国語を勉強する日本人が増え、韓国人も日本語を学ぶようになったという日本語教育の背景が書かれており、『簡易捷径日語独学』(1897)の緒言には、「今朝鮮で、新しく二商港を開発し漸々日韓の通商貿易を拡張するので、この時期に当たって日韓両国の人々が各々その語学を勉強しようとする者が多い」と学習書の発行当時の背景が書かれている。

以上から、開化期前期において社会的背景により日本語教育の必要性が高まっており、日本語教育において、言語教育以外の役割も求められていたことが窺える。

4. 金沢末吉について

著者の金沢末吉については、1980年に発刊された『丸善百年史』(p.1015)に、以下のように記されている。

金沢末吉は、慶応一月十一日岐阜県恵那郡岩村に金沢林平の四男として生れ、明治十一年十一月横浜丸屋薬店入社、のち細流社に移り次いでその経営下に入った横浜丸屋書店の経営を担当。二十一年五月唐物店の横浜出張所に転じ、この間朝鮮へ出張、唐物の販売に従事したが、三十年一月丸善大阪出版所に転勤、その後主任を経て、同出張所の支店昇格により支店長となった。(中略)大正十二年三月十五日第六代社長に選ばれた。

上記の内容から金沢が韓国に渡った経緯について窺える。また、『朝鮮銀行会社組合要録』1937年版、1939年版、1941年版、1942年版にも金沢が「丸善」の社長を務めていたことが書いてあり、一生に渡って出版社と関わっていたことがわかる。

〈資料2〉金沢末吉の写真（『丸善百年史』 p.1015）



金沢末吉（六代社長）

また、『官立仁川日語学校沿革史』には、官立仁川日語学校の開校(1895年)に関して以下のような記録がある。

又 在京城書肆出張店主金沢末吉日語捷徑三十冊を寄贈シ開校ヲ祝ス

前章の奥付には発行当時、金沢末吉の住所が東京市日本橋区通三丁目十四番地奇留になっていたが、上記の『官立仁川日語学校沿革史』から見ると金沢は韓国に滞在していたと考えられる。

以上の資料から金沢が10年余に渡り、韓国に出張または滞在していたことはわかる。しかし、当時の他学習書の著者が、通訳官または教師など韓国語に対し高いレベルの理解があったと見られる反面、金沢の韓国語教育歴については明確にわかる記録はない。

5. 構成及び特徴

『日語捷徑』は4ページの前書きと82ページの本文から成っており、目次は記されていないが、1ページから58ページの前半部は「文字部」・「単語部」・「会話部」の三つに分け

られ、58ページからの後半部は、単語と会話が折衷形式で記されている。

開化期前期の日本語学習書は、『日語捷徑』の後半部と同じ構成の『日本語独案内』(1895)を除くとすべて『日語捷徑』の前半部の構成からなっているが、二つの構成を採択している点は、『日語捷徑』の構成的な特徴である。

以下の〈表1〉は『日語捷徑』で記されている「文字部」の片仮名表である。

〈表1〉『日語捷徑』の片仮名表

ア	아	イ	이	ウ	우	エ	에	オ	오
カ	가	キ	기	ク	구	ケ	계	コ	고
サ	사	シ	시	ス	수	セ	세	ソ	소
タ	다	チ	지	ツ		テ	테	ト	도
ナ	나	ニ	니	ヌ	누	ネ	네	ノ	노
ハ	하	ヒ	히	フ	후	ヘ	헤	ホ	호
マ	마	ミ	미	ム	무	メ	메	モ	모
ヤ	야	イ	이	ユ	유	エ	에	ヨ	요
ラ	라	リ	리	ル	루	レ	레	ロ	로
ワ	와	井	의	ウ	우	エ	에	ワ	워
ン	은								

『日語捷徑』の「規範的表記」には、「エ列音」がすべて「ㅏei」で、「実際の表記」においても、会話文において、仮名のハングル表記がないため、その例は少ないのであるが、「고비 go-byi (p.64)」の例を除けば、「ㅏ ai」、「ㅑ @i」、「ㅏ ei」で音注されており、韓国語の単母音化が確認できる。

金明娃(2014:3)では、「20世紀前期の資料には예、세、ㄹ제を除いてはすべてㅏで表記され、前の時期と大きな違いがある。20世紀前期は韓国語の単母音化が既に実現された時期である。よって、20前期の資料から単母音化されたㅏを表記に積極的に反映したと考えられる」と述べており、日本語学習書の「エ列音」の音注表記において、18世紀から韓国語に実現された単母音化が大きい影響を与えたと見られるが、以下の〈表2〉で見られるように当時の他学習書の「規範的表記」においては、単母音化が反映されていない。

〈表2〉 開化期前期の日本語学習書の「エ列音」表記

	1891 『工夫』	1895 『捷徑』	1895 『案内』	1895 『朝雋』	1897 『獨學』	1905 『獨修』
エ	예 'iei	에 'ei	예 'iei	에 'ei	예 'iei	에 'ei
ケ	계 giei	개 gei	계 giei	계 giei	계 giei	계 giei
ゲ	--	--	ㄱ계 g-giei	ㅇ계 q-giei	깨 kiei	ㅇ계 q-giei
セ	세 siei	세 sei	세 siei	세 siei	세 siei	세 siei
ゼ	--	--	ㅅ세 s-siei	ㄴ제 n-jiei	체 ciei	ㄴ제 n-jiei
テ	테 dei	테 dei	테 dei	테 dei	테 dei	테 diei
デ	--	--	ㅅ테 s-dei	ㄴ테 n-dei	테 tei	ㄴ테 n-dei
ネ	네 niei	네 nei	네 nei	네 niei	네 nei	네 niei
ヘ	혜 hiei	혜 hei	혜 hiei	혜 hei	혜 hiei	혜 hai
ベ	--	--	ㅂ베 b-bei	ㅁ베 m-biei	페 pei	ㅁ베 m-biei
ペ	--	베 bei	페 pei	페 piei	베 biei	페 piei
メ	메 miei	메 mei	메 miei	메 mei	메 miei	메 mei
ヤ行	예 'iei	에 'ei	예 'iei	예 'iei	예 'iei	예 'iei
レ	례 riei	래 rei	례 rei	례 riei	래 rei	례 riei
ワ行	예 'iei	에 ei	워 uei	예 'iei	워 uei	워 uiei

また、『日語捷徑』の「規範的表記」と「實際的表記」は一致していない場合が非常に多く見られているが、これは文字をみて音注をつけたのではなく、音声から直接音注を

つけたと考えられる。

「単語部」には、数字・時間・方位・自然と10語の助詞が提示された後、27項目の例文が書かれており、日本貨称・朝鮮貨称と2文の例文が収録されている。「単語部」の構成も後半部と同様、単語と会話が折衷形式で記されている。

『日語捷徑』の「会話部」は「物貨売買」・「相逢人事」・「雑事問答」に分かれており、「物貨売買」には42文の商業関係の文が、「相逢人事」には日本人と韓国人が会う場面が設定され、問答形式の会話23文が収録されている。続いて「雑事問答」には84項目が収録されているが、前半は文型練習が中心であり、後半には日本語学習に関する問答が20文にかけて記されている。

対訳表記は大きく単語と会話文に分かれ、単語表記においてはいくつか揺れが見られるが、主に「日本語-日本語読みのハングル表記」(例：冬-하유, 朝-아사 p.11)になっており、会話文は「日本語文(漢字にカナルビ)-韓国語文」(例：安(ヤス)ク買(カ)イマシター싸게샅소 p.32)と書かれている。当時の他日本語学習書には日本語読みがハングル表記になっており、日本語読みができなくても学習が可能であるのに対して、『日語捷徑』は日本仮名の習得が前提になっており、またある程度の漢字力も必要とされていたと考えられる。

本書の会話部は、以下のように問答形式の場面シラバスと文型練習の構造シラバスの折衷形式を採用しており、会話の練習にも工夫をしていたことがわかる。

(1) 問答形式の場面シラバス

a. 코노紙ハ、一枚、イクラデスカ

이종의는、한장에、얼마요

b. 二十文ヅ、デス

두돈식이요

(p.26)

(2) 文型練習の構造シラバス

a. 三(ミ)ツアリマス

셋 잇습니다

b. ソノ、中ニアリマス

그 속에잇습니다

c. ソノ、上(ウエ)ニアリマス

- 그 우에잇소
d. 其(ソノ)下(シタ)ニアリマス
그밋테잇습니다
e. 其(ソノ)本(ホン)ノ下(シタ)ニアリ마스
그칙(의)밋테잇습니다
f. 其机(ツクエ)ノ上(ウエ)ニアリ마스
그칙상우에잇소

(pp.44-45)

58ページからは「日用物名(単語)」、「常食物名(単語+会話文)」、「官位(単語)」、「日本地名(地名+会話文)」、「雑話(会話文)」、「朝鮮地名(地名+会話文)」が収録されているが、最後の部分には以下のように社会的背景を示している内容が載せられている。

- (3) 日清戦争(ニチシンセンソウ)ハ、ドウナリマシタカ
엇덧케릿습닛가
和親(ワシン)ニナリマシタ
화친이되엇습니다

(p.81)

- (4) 도우云フ約束(ヤクソク)카成(ナ)리立チマシタカ
엇던약조가되엇습닛가
淸國(シンコク)ハ臺灣(タイワン)ト償金(シヤウキン)トヲ 出スコトニナリマシタ
淸국이티완과상금을일본에줄약조가되엇습니다

(p.82)

6. おわりに

本研究では韓国開化期における日本語教育の一端を知るため、開化期前期の日本語学習書の特徴を整理し、先行研究で個別的に検討されていない『日語捷徑』(1895)をとりあげ、その特徴について考察した。

開化期前期の日本語学習書は、形式上韓国人のために作られた独学用の実用書であり、その内容はいくつかの特徴が見られるものの、商業活動に関わる内容が多いという共通点がある。『日語捷徑』においても、単語編で「日本貨称法・朝鮮貨称法」、会話編では「物貨売買」という項目を設け、商業活動に役に立つ日本語学習に重点をおいていたと考えられる。しかし、序文では日本語を通じた文明開化を提唱しており、本文の例文に社会的背景を示している内容が載せてあるなど、日本語を「朝鮮を「開化」する外国語」とする考えも金沢にはあったとも見られる。

『日語捷徑』には、その音注表記において18世紀から韓国語に実現された単母音化が反映されており、助詞についての項目を設けられているなど、韓国語に対する理解が深いと考えられるが、『日語捷徑』の著者であるところの金沢末吉の韓国語教育歴については明確にわかる記録はない。10年余に渡り、韓国に出張または滞在していたものの、一生涯にわたって商業関係に携わっていた日本人が著した本であるとは考えにくい。金沢が序文に「編者識」と書いていたことも彼が本書の「著者」ではなく「編集者」であったことを示すものであるかもしれない。出版社に勤めていた金沢末吉の経歴、また、前半部と後半部に分かれている構成からみるとその可能性はさらに高まる。

以上の考察から『日語捷徑』は、日本語教育の必要性が高まっていた開化期前期の社会的背景で偏された商業出版物であったといえる。

【参考文献】

- 박성희(2005) 『개화기 일본어 교과서에 관한 연구』 고려대학교 대학원 박사논문
 이강민(2011) 「春園 李光洙의 日本語 學習書 『日語独学』에 대하여」 『일본학보』 제86집, 한국일본학회, pp.89-98
 편무진(2001) 「『韓国資料』의 기초적 연구(1) : 韓国人을 위한 日語學習書を 중심으로」 『일본문화학보』 제11집, 한국일본문화학회, pp.175-203
 한중선(1994) 「開化期 日本語 學習書 小考」 『일어일문학연구』 제25집, 한국일어일문학회, pp.139-168
 木下隆男, 立平幾三郎 編(2001) 『官立仁川日語学校沿革史 : 隆熙三年一月編』 木下隆男
 金義泳(2012) 『韓国の日本語教科書に関する研究 : 高等学校の教科書にみる日本観を中心に』 早稲田大学大学院博士学位論文
 金明娃(2014) 「20世紀初頭の日本語学習書の日本語のハングル表記に研究」 第65回朝鮮学会研究発表資料
 成玟珂(2014) 「開化期の日本語学習書『独学日語会話』に関する考察」 『日本語教育研究』 第28輯, 韓国日本語教育学会, pp.65-84

- 鄭光(2007)「韓国における日本語教育の歴史」『日本文化研究』第21輯, 東アジア日本学会, pp.315-333
- 陳南沢(2015)「1895年刊『日本語独案内』について」『大学教育研究紀要』11巻, 岡山大学言語教育センター, pp.43-54
- 黄雲(2015)「韓国開化期の日本語学習書『日語工夫』(1891)に関する考察」『日本語文学』第67輯, 韓国日本語文学会, pp.213-230
- _____(2016)『韓国開化期における日本語教育に関する考察』麗沢大学大学院博士学位論文
- _____(2017)「韓国開化期の日本語教育に関する考察 -日本語学習書による日本語教育の成立を中心に-」『日本語文学』第72輯, 韓国日本語文学会, pp.175-194
- 丸善株式会社(1980)『丸善百年史:日本近代化のあゆみと共に-上巻』丸善出版
- Hattori, Mina(2008) "National and Colonial Language Discourses in Japan and its Colonies, 1868-1945. Unpublished MA thesis" : UBC Department of Asian Studies.

【参考資料】

- ① 『日語工夫』(1891)
著者: 中野許多郎 発行日: 1891年5月21日 発行地: 釜山
- ② 『日語捷徑』(1895)
著者: 金沢末吉 発行日: 1895年5月31日 発行地: 東京
- ③ 『日本語独案内』(1895)
著者: 稲益謙吉 発行日: 1895年6月16日 発行地: 大阪
- ④ 『単語連語日語朝雋』(1895)
著者: 境益太郎・李鳳雲 発行日: 1895年6月 発行地: 京城
- ⑤ 『簡易捷徑日語独学』(1897)
著者: 弓場重栄 発行日: 1897年12月26日 発行地: 東京
- ⑥ 『独修自在日語捷徑』(1905)
著者: 金島苔水・広野韓山 発行日: 1905年9月21日 発行地: 東京

논문 투고 일자 : 2018. 06. 24.
논문 심사 일자 : 2018. 07. 31.
게재 확정 일자 : 2018. 08. 03.

 < 要 旨 >

韓国開化期の日本語学習書 『日語捷徑』(1895)について

黄雲

本研究では韓国開化期における日本語教育の一端を知るため、開化期前期の日本語学習書の特徴を整理し、先行研究で個別的に検討されていない『日語捷徑』(1895)をとりあげ、その特徴について考察した。開化期前期の日本語学習書は、形式上韓国人のために作られた独学用の実用書であり、その内容はいくつかの特徴が見られるものの、商業活動に関わる内容が多いという共通点がある。『日語捷徑』においても、単語編で「日本貨称法・朝鮮貨称法」、会話編では「物貨売買」という項目を設け、商業活動に役に立つ日本語学習に重点をおいていたと考えられる。しかし、序文では日本語を通じた文明開化を提唱しており、本文の例文に社会的背景を示している内容が載せてあるなど、日本語を「朝鮮を「開化」する外国語」とする考えも金沢にはあったとも見られる。『日語捷徑』には、その音注表記において18世紀から韓国語に実現された単母音化が反映されており、助詞についての項目を設けられているなど、韓国語に対する理解が深いと考えられるが、『日語捷徑』の著者であるところの金沢末吉の韓国語教育歴については明確にわかる記録はない。10年余に渡り、韓国に出張または滞在していたものの、一生涯こわたって商業関係に携わっていた日本人が著した本であるとは考えにくい。序文に「編者識」と書いていることも金沢が本書の「著者」ではなく「編集者」であったことを示すものであるかもしれない。出版社に勤めていた金沢末吉の経歴、また、前半部と後半部に分かれている構成からみるとその可能性はさらに高まる。

 Observations on *Nichigo Shōkei* (1895) in Korea's Enlightenment Period

Hwang, Woon

This paper examines the characteristics of the Japanese language education in the Korean Enlightenment Period with a focus on the *Nichigo Shōkei*(1895), one of the underexamined materials in the previous studies on the Japanese language education. Publications of the Japanese language manuals during the Enlightenment Period are generally known as business-oriented practical handbooks for self-study. The similar interest in studying the Japanese language can be seen from the *Nichigo Shōkei* (1895): e.g., the names of currency in Japan and Korea or trade in goods and cash. However, it is also evident from the Preface and a few examples in the manual that Kanazawa, the author, alludes Japanese as a language to 'enlighten' Joseon. In addition, his transcription of Korean as well as accounts of particles indicate that the author probably had a profound knowledge of the Korean language. Unfortunately, little is known about Kanazawa's career in Korean language education. Even though Kanazawa stayed in Korea on and off over 10 years for his work, it is doubtful that a Japanese whose career was entirely in commerce could write a language manual. In this regard, it is possible to conjecture that a note 'pyeonja-sik' in the Preface might refer Kanazawa as an editor, rather than the author of this manual. Considering the fact that Kanazawa worked for a publisher as well as the unusual division of this book in two parts seem to increase the possibility of the role of Kanazawa in the production of this book as an editor.